

倉庫ステーション の廃品回収

セイ・タロウ

倉庫ステーションの廃品回収

セイ・タロウ

「何度も言うけど。うちは由緒正しい質屋であって廃品回収業者じゃないんだからな。」

「はいはいわかってるわよ。こっちも何度も言うけど今日回収するのは廃品じゃないわ。」

地球上なら二人とも高らかに靴音を響かせながら早足でいる雰囲気だが、今いるのはスペースコロニーの宇宙船発着場に向かう通路なので、牽引レバーに引かれるまま浮かんで移動している。

通路の先を浮かんでいるのは高校時代からの友人のひさ子だ。

「しかし、あんたの宇宙服はずいぶんと不格好ね。」

「ほっとけ。じいちゃんの代からの年季もんだぞ。・・・おまえのはずいぶんとスリムだな。」

最新型の宇宙服は彼女のメリハリのある体のラインにぴったりフィットしている。

「へっへー。新調しちゃったのだ。」

「へっ。貸倉庫屋はずいぶんと景気がいいようで。」

スペースコロニーへの移民が始まってから四半世紀経ち、コロニー近傍の宙域に個人で宇宙ステーションを構える企業や個人が出始めた。

その連中が一時的に持ち物を預けるスペースを倉庫ステーションで間貸しているのが彼女の父親の会社だ。

この事業を始めるときには、ほんとに儲かるのかはなはだ疑問だったが、意外とまわっているらしい。

宇宙船発着場の入場手続きを済ませ、指定のドックに入る。

指定のドックに鎮座する宇宙船は予想外のものだった。

てっきり4トントラックくらいの大きさと思いきや、幅も高さもその2倍、長さは1.5倍といったところか。

「なっ。結構でかいな。」

「へっへっへー。燃料追加モジュール足せば月にも地球にも数時間で着くのよお。」

もう少しでホーッホッホッホと高笑いが聞こえそうだ。

真剣に転業を考える。

「いっやあ。でかいのはいいが・・・おまえ操縦できるのか？」

「もちよ。さあ乗った乗ったあ。」

コクピットは同じ構造の座席が二つだけで意外とシンプルだ。旅客機のような操縦輪と左側にスロットルがついていて、他にスイッチや計器などは一つも無く、モニターも見当たらない。

コクピットの前面は透明な強化ガラスになっており、外が透けてよく見える。

ひさ子は腰につけていた携帯端末を操縦輪にはめ込むと、だみ声で「さあいってみよう。」と唱えた。

「発信準備シマス。」

アナウンスが答えると座席の頭の後ろからV字型のアームが出てきて体を固定した。

かなり自動化されているらしい。

約2時間程すると貸倉庫のステーションに着いた。

貸倉庫は複数の立方体のモジュールを一つの立方体になるように繋ぎ足していく構造になっていて、モジュールには各辺に荷物を格納する部屋が3つある。そして各面の真ん中を貫くように通路が通っており、組み合わせても全てのモジュールに行き来できる構造になっている。

ルービックキューブの真ん中の面を通路にした構造と言える。

モジュールは長い辺で7個だが、一角に未連結な部分があるので正確に一辺が7モジュールにはなっていない。

宇宙船は一角のドッキングモジュールに横付けされた。

「おい。ドッキングしないのか？」

「うーん。出入り口が合わないのよねえ。横付けかな。」

「ええー。外にでるのかよ。」

「そうよ。だから宇宙服着て来るように言ったんだけど。」

そう言うとひさ子は出入り用のハッチに向かった。

「・・・じいちゃん・・・大丈夫だよな、これ。」

じいちゃんの形見、ではなく借りた宇宙服は特に「漏れ」もなく倉庫ステーションにたどり着いた。

倉庫ステーション内には空気があるので、船外で膨らんだひさ子の服が元のサイズに戻っている。ヘルメットも取っていた。

「あれ。中には空気あるんだ。」

「そりゃそうよ。地球の部屋にあるような状態で保管するサービスだから。温度や湿度も調整して一定にしてるのよ。」

なるほど、少々賃料がお高いわけだ。

ひさ子は宇宙船から外した端末で格子状の薄暗い迷路を右へ左へと曲がり迷わず目的のモジュ

ールに着くと、目的の部屋の前で止まった。

「さあ運び出すわよお。」

「あのさ。いくら料金滞納っても気が引けないか？」

「何言ってるのよ、こっちだって商売なんだし、そもそも滞納したら荷物は処分して精算することで契約しているんだもん。裁判に基づく強制執行よっ。」

「以外と危険物があったりして。」

「ちゃんと入庫時に社員が立ち会ってチェックしているわよ。逆に意外なお宝があるかもよ。」
そう言いながらドアに暗証番号を打ち込み、バイオメトリクス認証も受ける。

ところが、解錠の表示がされない。

「あら。」

「なんかちっちゃい赤ランプが点灯してないか？」

俺はドアの窪みにあるレバーを下向きから右に上げるようにひねると斜め途中まで廻った。そのままドアを押してみるが開かない。

「鍵が開いているのかしら？そのまま引いて。」

今度は引っ張って見たがやはり空かない。

「なにやってんのよ。引くのよ、引き戸なんだから。」

「はぁ。引き戸？」

横にスライドするとわずかに空いた。

「うぐぐぐ」

力を込めてゆっくりとドアを開く。

中に入ると自動的に照明がついた。

部屋は立方体で一つの辺が4メートルくらいある。

部屋の周りには何かを収納するボックスが整然と列べてあったが、部屋の真ん中に食べ散らかした宇宙食の容器やら飲料用のペットボトルやらが散乱していた。

「何これ。」

ひさ子は携帯端末で収納リストを確認する。

「まるで誰かここで暮らしていたようだな。」

「そんなばかな。確かに空気はあって適温だけど、生ものは預かってないわ。」

ひさ子は携帯端末から目を離し、先に部屋に入る。俺も用心深く後から入ろうとすると。

「だっ誰？」

急にひさ子が振り向きざま叫んだ。

俺は反射的にドアの端をつかみ勢いよく部屋の外に体を移動させる。

あ、しまった。こういう時は女の子を守る方に動くべきだった。

後悔しながら部屋をそろそろ覗く。

「ど、どした？」

ひさ子が「じと目」でこちらを見ながら、俺の右手を指さしている。

右を見ると女が浮かんでいる。

「ひっ。」

また驚いてしまった。

「小心者っ。人間じゃないわ。アンドロイドみたい。」

よく見ると黒っぽいメイド服を着た女形の人形が目を開けたまま「気をつけ」状態で部屋に紐付けされてる。

「こっこのいつが飲み食いしていた？」

「まさか。他に誰かいたのかもしれないわ。」

しゃべり終わるか否かで室内に衝撃があり、同時に食べ散らかしなどが浮遊し始める。

間もなく警告音と共に非常用の照明に切り替わってしまった。

「なっ何？・・・ええっ火災？」ひさ子が携帯端末の表示に釘付けになる。

「隣のモジュールだわ。」

通路にでると心なしか焦げ臭い。

「消火設備は動作してるのかな。」

「ちょっと見てくる。」

ひさ子はヘルメットをかぶると隣のモジュールに飛び出した。俺もヘルメットを締め始めた。古い宇宙服のヘルメットをもたくたつけて、現場に追いつくと、ひさ子が消化器で消化中だった。火の勢いが結構強いのか消化がスムーズにっていないようだ。

「他の消化器は？」

「各モジュールに一個ついてるわ。真ん中の通路の交差するところに行けばわかる。」

慌てて元いたモジュールに戻ったところでまた衝撃があった。

今度は空気が流れ始めている。

「おいっ。穴、空いてねーか？うわわわっ」

はじめに明けた部屋から通路に飛び出た食べかすなどが空気の流れに沿って向かってくる。扉につかまっていたが、手袋が膨らみ始めてついにつかまりきれなくなった。ひさ子のいるモジュールの方に流され始める。

ひさ子の方を見るとそのずっと先の通路の突き当たりにはぽっかり穴が空いていて、外（宇宙）が見えている。ひさ子はモジュールの継ぎ目の角につかまって吸い込まれないように踏ん張っていた。

俺は通路のちょうど真ん中を流されているので何かに捕まることができない。着ている宇宙服には動力がついていないので姿勢も制御でない。

やばいっ。吸い出される。

そう思ったときに急に空気の流れが止まった。

が、体に加わった慣性エネルギーはそのままなので、何とか隔壁扉を閉めたひさ子に激突した。

「きゃっ。」

「うぐっ。」

気圧が下がって膨らみかけた宇宙服がクッションとなったが、ヘルメットは大きな音を立てた。

「ったいわねえ。」

「しょっしょうがねえだろ。」

「何でもいからこのモジュールの隔壁扉を全部閉めるわよ。急いでっ。」

慌てて手分けして残りの5つの扉を閉めた。

「しかし、なんで俺たちが入ったとたんに火災なんだ？」

「やっぱり誰か入り込んでいたみたいね。で、あたしたちに気づいて逃げ出した。」

「倉庫に警備システムは無いのか？」

「分からないけど常時監視はしてないと思う。進入するならやり様はいくらでもあるわ。所詮貸しスペースの倉庫ステーションだからいろんなコストは抑えてあるだろうし。」

「警備システムが頼りにならないってことは助けを呼ぶ必要があるな。」

「今、とうさんの会社にメールを打ったわ。ステーションの無線LANが生きてるみたいだから事務の誰かがメールに気づくでしょ。」

「気長に待つしかないということか。」

二人はモジュールの中心に背中合わせに浮かんでため息をついた。

「そうだ、服の酸素は節約しておこう。」そう言ってヘルメットを取ったとたん俺は咳き込んだ。

「おい、まだ火が収まってないぞ。」

非常用電源で薄暗かったので気づかなかったが、まだ火がくすぶっていて、煙が充満しつつあるらしい。

「有毒ガスがあるかもしれないからメットは取れないな。酸素あとどれくらい保ちそう？」

「・・・。」

ひさ子から応えがない。

「おいっ。」

「一時間半・・・ってところね。そっちは？」

「こっちは表示が無いが、こっちも同じようなもんだろう。他の部屋に入れられないものかな。」

他の部屋も全て試したが、全て解錠パスワードが違っていて開けられない。

結局、こちらひさ子が会社にメールで問い合わせるが、そもそも返信が無い。

「他のモジュールに移ってもだめかな。」

隔壁扉に行ってみたが、開けるための扉の取っ手が見当たらない。

脇の説明書きを見るとどうも一旦扉を閉めてロックがかかると簡単には空けられない様である。更に読み進める。

「ありゃ。慌てて全部締めたけど、基本的に空気が抜けると留め金が抜けて風圧で閉まる構造じ

やん。」

ということは、穴に近い他のモジュールの隔壁扉が閉まる可能性があったわけで、このモジュールの全部の扉を閉める必要は無かったかもしれない。

「・・・ごめん。慌てた。」

ぼつり、とひさ子が言った。

「・・・んじゃ他の手を考えっか。なんかねえかなあ。」

こういうときは深刻にならってもしょうがない。

しかし、いいアイデアも浮かばずに一時間以上経った。

酸素を消費しすぎないようにゆっくりと動いてモジュールの通路をあちこち回ったが、特に何も見つからなかったので、モジュールの中心に戻った。

ひさ子は動かないで浮いている。妙に静かだ。

「おっおい。大丈夫か？」

肩をつかんでメットを覗くと通信を切ってベソをかいていたようだ。

「は、ははは。脅かすなよ。」

早々と最期の手段を使ったのかと心配してしまった。

もっともこちらの服は少々息苦しくなり始めていた。

火災のあった部屋の方を見ると、くすぶっていたときに見えていた赤い光が消えて真っ暗になっている。火も酸素を使い切ったようだ。

「・・・火、消えたみたいだぜ。・・・何か、使えるもの・・・ないかな。」

ふらふらと部屋に入ってみると丸めた布の様なものが暗い部屋に真っ黒く漂っていた。奇跡的に非常灯は生きている。

見回すと衣類が入っていたと思われる箱が何個も乱暴に蓋を引きちぎられた状態で空けられていた。

一部はまだ箱の中に収まっているものもあったが、どれもかなり大きい。

借り主は大判の衣料を扱う業者だろうか。

酸素が減ってきた頭でぼーっとしてしていると、ひさ子が勢いよく飛び込んできた。

漂う焦げた衣類を振り払い、携帯端末の画面の明かりを頼りに何か探しているようだった。

「あった。」

そう言うと、部屋の奥にあるクローゼットの様な開き扉のコンテナを空けた。

出てきたのはサイズがXXXL級の宇宙服である。

取り出して背中側のスイッチを押すと背中から頭の部分がハッチになっていて、上向かって開いた。

「こっちに・・・着替えましょ。」

「え、一緒に・・・入るってことか？」

「入らないの？」

選択の余地は無かった。

「いっせいの、せっ」で来ている宇宙服を脱ぎ始める。

先に脱いだひさ子が宇宙服に入り、急げと言わんばかりに手招きする。

室内の汚れた空気を吸わないように息を止める。

俺も何とか脱いで一緒に入り、後ろ手でハッチを閉めた。

服の中に部屋の空気が入ってしまったので、二人とも大いに咳き込む。

「はあ、はあ、何とか繋いだわね。」

「ああ。」

宇宙服は超大判なので、動かない限りは、宇宙服の下着のまま密着することは無い。

サイズは二人で着ても十分で、腕は袖を通さずとも胴体の部分入れたままでも動かせる余裕すらある。

しかし、ひさ子は袖を通して動き出した。

「おととと。どうした。」

「さっき着替えるときに端末を放りだっちゃった。あれがないとメールが確認できない。」

脱ぎ捨てた服の近くに漂っている端末を腕で抱えるようにかキャッチしたが、タッチパネルでの操作ができない。

「まあメールが来るまでは触る必要ないかしら。」

「こっちの服のコンピューターは使えないのか？」

ひさ子はしばらくグローブの先の方をごそごそしていたが、ため息と共に動きを止めた。

「そもそも無線LANにつながらないわ。」

何もすることが無いので一時間無言で宙を漂っていた。

しゃべると酸素を浪費してしまいそうなので話もできない。

そのうちに、服の中が暑くなってきた。

「廃熱が十分でないな。」

二人分の汗でメットが曇り始めている。

「・・・外気は22度よ。」

「火は消えても煙は消えていないだろうな。」

「でもこのままじゃ熱中症だわ。」

思い切って服を空け、中の空気を出す。ついでに端末も回収して服を閉じた。

二人とも先ほどより酷く咳き込む。

「しっ死ぬかと思った。・・・それに、気分が悪くなる。」

ひさ子からすぐに応えは無かった。肩で息をして本当に辛そうである。間違っても服の中でリバースしないでくれよ。

しばらくするとまたしくしく泣き出した。

「もっもうだめかもね。暑いし、そのうち苦しくなるのかな。・・・どうしよう。私まだ死にた

くない。」

「おっ落ち着け、なっ。ぎりぎりまで何か手が無いか考えよう、なっ。」

こういう状況の時には先にパニックになった人間が他にいた方が不思議と自分は冷静になれるようだ。・・・まあ最悪、最期の手を使って長く苦しめないようにするしか無いのだが。

「うん。」

力なくひさ子は答える。

俺は最期のことは口に出さず、そろそろと部屋を出るべく手足を動かした。

動くとき体が触れる。

こんな時でも若い男女が密着しているとなんだか妙な気分になれる。

そうか、もし、これで最期ならせめて最期に・・・二人とも下着だし、この程度の空間があれば。

「あっ！」いきなりひさ子が頭を上げたので後頭部が鼻に当たった。

「がっ・・・ろっろうひた。」

「この服、作業用だから腕がマニピュレーターよね。」

ひさ子はそう言うのと回収した端末を操作し始めた。

しばらくして、外部に振動があり、部屋がゆっくり動き出した。

ひさ子主導で移動し始める。

今度はぴったり体がくっついた。

ひさ子も汗まみれで、体が熱い。

ひさ子は何も言わずに隔壁に近づき、ハッチの取っ手をマニピュレーターで引っ張り始める。マニピュレーターのモーターがうなりをあげているせいか、ますます暑くなる。

「こっこの服って飲料水とか無いのかな。」

「あ、ああ。・・・そっか。・・・いや、あったとして飲めるかしら。」

ひさ子の横からストローのような飲み口が出てくる。

「俺が、どっ毒味してみる。」

特に妙な味はしなかった。

「だっ大丈夫みたいだ。まあ古くても直ぐに腹はこわさんだろう。」

ひさ子もごくごく飲み始める。

一息ついた頃、マニピュレーターで開けたハッチの隙間から徐々に空気が抜けていく。

十分に減圧したところでハッチを空けた。

外に出ると各モジュールがバラバラになり始めていた。

「この倉庫はモジュールの接合解除と同時にハッチのメインロックが外れるようになっているみたい。」

それって安全に配慮してあることになるのか？と思いつつ外に出る。

モジュールの外には太陽の光が当たっていた。

「やべっ、日陰に移動しなきゃまずいぞ。」

「わかってる。」

ひさ子は慌てて服のマニュアルらしきものを表示させて確認し始める。

モジュールの影に入らない状態でも宇宙服の中が涼しくなってきた。

「あれ、涼しくなってきた、日が当たってるのに。真空の方が冷やせるものか？」

「真空だから効率よく冷却水を蒸発させられるのかもね。」

急に服が移動し、左右に回転し始める。

「うわわわ。うまく操作してくれっ。」

しばらく上下に回転したり移動したりしていたが、そのうちバラバラになったモジュールの周りをうまく周回できるようになったので、ドッキングモジュールを探した。

「ないっ。ないないない。何で、何でえ。」

ドッキングモジュールはあったが、乗ってきたはずの宇宙船が無いのだ。

「やられたのかな。」

「まっまさかぁ。車じゃあるまいし、ってか今どき車だって持ち主以外が動かすことなんかできないわよお。」

「操縦してはな。」

ひさ子は黙り込んでしまった。

「誰か知らないけど・・・生きて返ったら殺してやるう。」

そりゃ化けて出てやる、にはなりたくないわな。

ひとしきり落ち込んだところで端末のメール着信音が鳴る。

ひさ子は端末にしがみついてメールを確認した。返信すると同時に宇宙服のコンソールで酸素残量を確認した。

「・・・だめ。とても2時間半なんて保たない。」

「他のモジュールに入って待つことは無理かな。」

「無理よ。ハッチを開けるときに廊下の空気は出てちゃうし、部屋のロックは解除できなかったじゃない。」

ひさ子はまたしくしく泣き始めた。こんなに泣き虫だったのか？

再びメールの着信音。

だが、ひさ子は動かない。

「・・・いっいやぁ、まあ短い人生だったかもしれないけど、とびきりの女の子と心中なら、まあいっかぁ。はあっははは。」

少し笑いが乾いてしまったが、ひさ子がのろのろとメールを確認し始めた。

「とびきりの、なによ。」

ぶつぶつ言いながら直ぐに返信し始める。

「心中なんてまっぴらよ。・・・やりたいことがいっぱいあるんだから。」

宇宙服の姿勢を変えながら周りを確認し始めた。

「月と地球の位置から・・・こっちね。」

「まさか、こちらからも移動するのか？」

「よしっ。」

ひさ子のかけ声と共に服から噴射音が聞こえ、服に背中を押された。

これは「賭け」だ。お互い最短コースで近づければ助かるが、ずれてしまえば動かないより事態は悪化する。

「ひさ子っ。救難信号入れとけ。」

そして約1時間半後、奇跡的に前方に点滅する光が見えた。

「やった。助かったぞ、ひさ子。」

同時に噴射音で更に加速した。

「おいおい、加速でなく減速だろ。ぶつかっちゃうぞ。」

「もしもしっ、聞こえますか、こちら遭難者。ひさ子です。至急回収してください。」

「ひさ子っ。間に合うよ大丈夫だよ。」

「間に合わないわよっ。」

案の定、減速が間に合わず助けに来た宇宙船の胴体に衝突した。

同時に俺の下腹部あたりに暖かい液体で濡れた感触が広がる。

「・・・あ、ああ、・・・間に合わなかったんだね、トイレ。」

「ああ～ん。」

ひさ子はまた泣き出した。

そして、服の中に広がる香り（におい）と安心感で不謹慎にも縮んでいた俺の「もの」が元気になってしまった。

「ひっ、ばっかっ、へんたいっ。」

おわり